

1970年代の日本におけるカニンガム受容
How Japanese experienced Merce Cunningham in
1970s

國學院大學大学院文学研究科
史学専攻美学美術史コース博士課程後期
三宅 香菜子

1、はじめに

本発表では、1970年代の日本でマース・カニンガムがどのように受容されたかを明らかにする。64年初来日公演の批評と76年の公演批評を比較検討し、従来研究されてこなかったカニンガム受容史研究に新しい局面を切り拓く。

2、1964年の来日公演批評

秋山邦晴と東野芳明は、64年当時の日本の芸術批評の文脈で使われていた「総合」という言葉を使ってカニンガムを評している。60年代に使用された「総合」という言葉は、今までにない新しい芸術を評する言葉として好意的な批評をする際に使われており、カニンガム作品にみられる、音楽・ダンス・美術の相互独立性を表す言葉として「総合」という言葉を用いたと考えられる。好意的な批評をもって迎えられたカニンガムだが、光吉夏弥が「カニングハムの名は、日本の観客にはまだ広くは親しまれていない。」ⁱと指摘したように、一般の観客にとってなじみがなかったせいか、朝日新聞の記事では「客席は、「よくわからないが、なんとなく面白い…」そんなふんいきだった。」ⁱⁱと書かれている。

3、1976年の来日公演批評

76年の公演は、カニンガムが「観衆が信じられないくらい熱心なものには驚きました。京都では、大きな体育館のオープン・ステージでやったんだが〔中略〕二千五百人の観衆でいっぱい、こういう“まじめ”な催しにあれだけ入ったのは、あの体育館ではじめてだったそうだ」ⁱⁱⁱと証言しているように、日本の観客たちは大いに興味をもって受けとめたようである。

佐藤滋は、今回の公演は、厚木凡人や、前年に来日したトリシャ・ブラウンに比べて一歩物足りないと評した一方で、「カニンガム個人の踊りは（つまりダンサーとしての彼は）、独自の世界を形作っているように思われる。」^{iv}とし、カニンガムの踊りを高く評価している。

市川雅は秋山邦晴と行った対談のなかで、カニンガム以外のメンバーにはバレエの制約が強く感じられるのに比べて、カニンガムの踊りにはそれがなく、「ソロが非常にリラックスした感じで、感心した」^vと述べている。それを受けて

秋山は、今回の公演は64年の公演とはメンバーが変わっているために、作品の中での個性のぶつかり合いがなくなり、全体が小粒になってしまったと述べている。一方でカニンガムの踊りは「やはりある一つの円熟というか、自在になっているというか、表現力がもっと豊かになったというか、個性がさらに深くなったというか」^{vi}と評価している。

4、おわりに

64年の公演批評からは、今までにない斬新な芸術として作品を受けとめたことが伺える。一方76年の批評では、カンパニーとしての評価は低く、カニンガム個人の踊りに対する評価が高い。これには、マーサ・グラハムをはじめとするモダンダンスのみならず、そこから逸脱するダンスについても目にする機会が増えてきたことが影響しているのではないだろうか。

75年に西武劇場で行われた「ダンス・トゥデイ・'75」には、トリシャ・ブラウンをはじめアメリカのポスト・モダン・ダンスのダンサーたちを招聘し、日本からも厚木凡人と花柳寿々紫が参加している。それに合わせて市川雅の『アメリカン・ダンス ナウ』がパルコ出版から出版され、アメリカのモダンダンスやポスト・モダン・ダンスがカラー写真付きで紹介された。

64年当時は新しいダンスを受けとめる土壌がまだ形成されていなかったために、作品全体を斬新なものとして受けとめていたが、76年になると、批評家の中には、作品を大きくとらえるだけではなく、詳細な分析を行うことができる人物も出てきていたと言えるのではないだろうか。

ⁱ 「偶然とマンハッタン調 マース・カニングハムと「ウェストサイド物語」」『読売新聞』1964年11月6日付夕刊。

ⁱⁱ 「なんとなく面白い—偶然を認める前衛舞踊—マース・カニングハム公演」『朝日新聞』1964年11月17日付夕刊。

ⁱⁱⁱ ジョン・ケージ、マース・カニングハム「ソロは茸が嫌いだった」東野芳明著『つくり手たちとの時間—現代芸術の冒険—』岩波書店、1984年、pp.104-105（初出：『流行通信』1976年7月号）。

^{iv} 佐藤滋「物足りない一歩の差 独自の“老境芸術”みせるソロ」『週刊オン★ステージ新聞』1976年5月7日。

^v 市川雅、秋山邦晴「マース・カニングハム・ダンス・カンパニー」『音楽芸術』音楽之友社、1976年6月、p.74。

^{vi} 同上、p.74。